
わたしにさよならを

弥生雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わたしにさよならを

【Nコード】

N8681S

【作者名】

弥生雨

【あらすじ】

素直になれない娘と、寡黙な父の話。

ややSFチックな短編。

『わたしにさよならを』

0

わたしは、パパと話さない。

もう、一言も交わさない、というほど極端じゃない。

必要最低限な会話くらいはする。

でも、ここ十年くらい、本当に、家族らしいと思えるような団欒をしたことがない。

団欒、と言えるほどに家族がいるわけでもないけれど。

ママは、わたしが生まれたときに、病気で死んでしまったらしい。わたしにママはいない。いるのは、パパだけ。

学校から家に帰ってくると、パパは低く小さな声でお帰り、と言って私を出迎える。

パパは小説家で、家にこもりがちだ。

そこそこ売れているようで、きちんと生活はできている。お金に困ったことは一度もない。

困ったことと言えば……パパと、会話が少ないことだけだ。

パパは物静かで、口数が少ない。いつも、どこか疲れ切ったような、寂しい表情をしている。

家族だから、よく顔を合わせるのに……でも、パパと何を話せばいいのか、わたしには分からない。

パパもきつと、そう思っているのかもしれない。

わたしは、パパがよく分からない。何を考えて、何を思っているのか……それが、いまいづつかめない。

飄々としている、とでもいうのだろうか。つかみどころのない雰囲気を持っている。

そうして、あまり話さない日々がずっと続いて、現在に至っている。

ときたま、とりとめのない話をする。いや、話、と呼べるものでもない。

気がついたときに、二言三言交わすくらいだ。

それでも不思議と、パパを嫌いになつたことは一度もない。

パパのことは、好きだ。わたしにとっては、たった一人の、かけがえない肉親だもの……。

たまには……いや、切実に、パパとは、きちんと向き合って話し合いたいと、わたしは思っている。

思っているけれど……どうにも、踏ん切りがつかない。

どう切り出したら良いだろう。

それをずっと考えている間に、いつも機会を逃してしまふ。

逃してしまふ、という言い方はちょっとおかしいか……。

機会なんて、いくらでもある。同じ屋根の下に暮らしているんだもの。

でも、いざ となると、その勇気がわかない。

いったい、いつになったら、わたしは……まともに、パパと会話ができるようになるのだろう。

1

「ただいま」

帰宅したわたしは、玄関の扉を開きながら、呟いた。

奥にも届かないほど、小さな声。

でも、かならずパパは反応する。

仕事部屋 二階から、やや早足で降りてきて、わたしを出迎えてくれる。

「おかえり」

パパは低く、よく通る声で言った。

「うん、ただいま」

わたしは、もう一度呟いた。一瞬だけ、パパを見た。パパはまだ微笑んでいた。

相変わらずの、寂しそうな目。

文字通り、大切な人に先立たれて空虚になった雰囲気がある。

ママが亡くなって、十六年。パパは未だに、立ち直れていないのだろうか。

わたしも、いつのまにか十六歳になった。それを、パパはどう思っているのだろうか……。

靴を脱いで、私はリビングへ向かう。後ろをゆったりついてくるパパが、訪ねてくる。

「晩飯は、どうする？」

「まだ大丈夫。もう少ししたら、お願い……」

言っと、パパの「ああ」という声が聞こえた。続いて、階段を上る音。

仕事の途中だったのだろう。仕事部屋に戻っていった。

パパの仕事部屋には本が沢山ある。

自分が書いた本もちろんあるが、それいかに、内容が難しくてよく分からない本が、本棚にぎっしりと詰まっている。

前に、興味半分で一冊抜いて目を通してみたけれど、難しすぎて頭が痛くなった。

パパのママ　つまり、わたしのおばあちゃんも、小説家だったみたいで、パパはおばあちゃんの小説も、しっかり持っていた。

わたしは、おばあちゃんに会ったことがない。

おばあちゃんは、おじいちゃんと一緒に外国の方へ移住してしまったのだと、パパは言った。

少し前に、

「パパはどうして一緒に移住しなかったの？」

と聞くと、パパは、「お前がいるからな……」と答えただけだった。

きっとパパは、外国が好きではないのだろう……。なんとなく、

そう思った。

外国は、治安が悪いと聞く。もちろん、日本も治安が悪いところは悪いけれど。

勝手知ったる日本のほうが、やっぱり、落ち着くのだろう。

わたしはリビングに入り、冷蔵庫から水の入ったペットボトルを取り出して、口飲みで一口飲んだ。

コップを出すのは、面倒くさい。水を冷蔵庫に戻し、リビングを出る。

あまり足音を立てないように、階段を上がる。パパの仕事部屋の向かいが、わたしの部屋だ。

仕事部屋の扉が少しだけ開いていた。わたしは、そっと部屋をのぞき込んだ。

隙間から、パパがパソコンに向かい難しい顔をしているのが見えた。

じゃましちゃ、悪いよね。

身を引き戻して、わたしはそっと自室へ入った。鞆をカーペットに落として、ベッドに飛び込む。

そして、深く息をついた。

また、失敗しちゃったかな……。

でも、夕食の時間もあるし……、うーん、でも……。

考えれば考えるほど、目の前がグルグル回り出す。

不安になる。だめだ。考えるのは、やめよう……。

抱き枕を引き寄せ、ぎゅっと抱きしめた。

部屋は、電気をつけていないので暗い。

薄闇の中で、わたしはもう一度ため息をついた。

パパには、話さなければならぬことがある。

それは、わたしが普通の人間ではない、ということだ。

けれど、きつと今日も話せない気が、どこかでしている。

そう話すことで、気味悪がられたりするかも知れない……。

それだけが、ただ怖くて、わたしはきつと、今日もパパとは話せ

ない。

2

天井へと、ゆっくり手を伸ばす。

何を掴むわけでもない、この手。目を閉じる。息をゆっくりと吸い込んで、はき出した。

目を開く。手を机の上に放置していた空き缶へと振り抜いた！

瞬間、

かかかん、と小さく甲高い音が、幾度も部屋の中で響いた。

空き缶が、僅かに浮き上がって 机の上を転がり、床に落ちた。

穴だらけになったそれを、わたしは冷めた目で見つめた。

缶に穴を穿ったものは、影も形もない。

当然だ。

文字通り、それは？空気？でできているのだから、役目を終える
と、すぐに消える。

これが、？スパンキー・スパイニー？と名付けて呼んでいる

パパにも話していない、わたしの特別な？力？。

空気を構成する気体、その大部分を占める窒素を固体化させるこ
とができる能力だ。

針のように尖らせて、標的を刺し貫くことが、主な用途になる。

そんな物騒なことを何故わたしが知っているのか。その答えは明
白だ。わたしはこの能力を、他人に向けて使ったことがあるのだ。

一度だけではない。何度も、何度も使った。自分の身を守る為に。

どうもわたしは？普通？という枠に収まりきらない種類の人間に
命を狙われるきらいがあるようだ。つまり、わたしとおなじように
奇妙な能力を持つ人間に、である。

パパには、このことを話していない。話さなければならぬだろ
う けれど、それができない。

だって、パパはわたしと違って、ごくごく普通の人間だから。

ヒトという枠に収まり切れない異常な存在同士が殺し合う そ

んな危険な裏の世界に、パパを巻き込みたくない。たださえ、わたしにママはいないのだ。

この上、たった一人の肉親であるパパを失ってしまうだなんて想像もしたくない。

パパは何も言わないけれど、とてもわたしを心配してくれている。きつと、命を狙われているなんて告げたら。

わたしは頭をぶんぶん振って、脳裏を過ぎった最悪な想像を吹き払う。

だめだ。言えない。言うわけにはいかない。パパを、絶対に巻き込むわけにはいかない。

これは、わたしの問題だ。普通の人間ではない、わたしだけの……。

何分くらいたっただろうか……、ふと、わたしはため息をついて、上半身を起こした。

そのとき、こんこん、と部屋のドアを叩く音が聞こえた。パパだ。「何？」

パパは扉一枚を隔てた向こう側から、言った。

「そろそろ、晩飯作るうか？」

「あ……、うん、お願い」

「分かった」

答えて、扉の向こうの気配が去ってゆく。

「……………」

そろそろ、降りなきや。

わたしは部屋を出て、ゆっくりと階段を下り、リビングへ向かう。

3

オムレツ、野菜炒め、玉子スープ。パパは料理上手だ。

わたしとパパは向かい合って座り、食事を始める。

我が家の食事は、とても静かに始まり、静かに終わる。

パパはもともと口数が少ないし、わたしも何を話して良いのか分

からず、お互いだんまりとしたまま料理を食べる。

時計の、カチ、カチと秒を刻む音だけが、リビングに響いてゆく。ややあって、パパが、

「学校は、どうだ？」

と差し障りのないことを聞いてくる。だからわたしは、

「うん、成績も悪くないし、いじめられたりもしてないし。楽しいよ」

「そうか……。良かった」

二言三言交わして、まただんまり合戦。本当はもつといっぱい話したいことはあるんだよ、パパ。

わたしのこと、たくさん。でも言えないんだ。パパは普通の人だから、そしてわたしは普通じゃないから。

そっちの世界にパパを巻き込みたくないから、わたし、言えないの。ごめんね、パパ。

夕食を食べ終わり、ごちそうさまをしてから、わたしは食器を片付けに行く。と、そのとき、

きいん、と頭の中に叩き込まれるような鋭い音が、響いた。パパには聞こえない、わたしだけに聞こえる音。

わたしを狙う、普通じゃないヤツが近づいてきていることを示す証しなのだ。

「ねえ、パパ。ちょっとコンビニに行ってくるね」

「……大丈夫なのか？」

「うん。だつてすぐそこだもん。大丈夫、心配しないで」

笑ってみせると、パパはため息をついて、

「遅い時間だから、気をつけてな」

食器を流して洗い始めた。

わたしはブルゾンを着込んで、ゆつくりと外へ出る。外は暗く静まりかえっていて、時折遠くの方から車の音が聞こえる。虫の音が寂しそうに響いている。わたしは意を決して、歩き出す。

また、戦って、誰かを傷つけなきゃいけない。

わたしは敵を必ず倒して、そして無事に帰ってこなければならぬのだ。
パパを心配させるわけにはいかないから。そして、敵を逃がしてしまい、パパに被害を及ぼせるわけにはいかないから。
ここで、必ず倒す。倒してみせる。必ず。

4

人通りのない広場に、わたしは足を運んだ。敵がしっかりとついてきているのを、わたしは知っている。

ざ、という足音。振り向くと、ニット帽をかぶった、人相の悪いおじさんが一人。

「驚いたな。こんなガキが、ねえ」

何が驚いたのか、わたしには分からない。わたしを襲おうとする敵は、いつも決まってわけの分からないことを言う。

リヴァイアスがどうだの、リヴァイアサンがどうだの、死神がどうだのと。まったく意味が分からない。

「おじさんは、どうして私を狙ってるの？」

訊ねると、おじさんは肩を竦めて、

「お前がどちらに転んでも、困る人たちがいてね、その人たちの為に、殺さなきゃならないのさ。お前をな」

「どこかの組織に、所属しているの？」

「そういうことだ」

人殺しばかりが所属する大きな組織。そこから派遣されてきたのが、おじさんというわけだろう。

手足が微かに震える。戦う前は、いつだって怖い。その震えが伝わったのか、おじさんが意地悪く笑う。

「震えてるじゃないか。ま、こんな子供ならしょうがないだろうけどな。今から死ぬってなれば、そりゃ震えだしたくなるだろう」

「残念だけど、わたしはおじさんに殺されるわけにはいかないんだ」
わたしは震えを押さえ込んで言う。

「死ぬのは、おじさんのほうだよ」

「は、面白い。やってみるよ」

おじさんはポケットから、危なっかしい折りたたみナイフを取り出した。

すつと右手を持ち上げ、わたしはスパンキー・スパイニーを発動させる。空気中の大部分を占める窒素が針の形に固形化され、宙に生成、それをおじさんめがけて一気に飛ばす。

舌打ちをもらし、おじさんはそれを躲す。続けざま、窒素の針をおじさんへ撃ち込んでゆく。

おじさんは手慣れているのか、実に器用に針を避けている。ナイフを投げつけてくるけれども、わたしはそれを針で叩き落とした。

「未恐ろしいガキだ」

忌々しげにおじさんがもらす。わたしだって、今日初めて、おじさんのような人を相手にするわけではない。手慣れたものだ。

不意に、何かを飛ばすように、おじさんは手をぱつと開いた。と同時に、ずん、ととつもなく重たいものを背負わされたように、体が重くなるのをわたしは感じた。倒れてしまいそうになるのを、必死にこらえる。

「《グラビティ・フォール》を食らっても倒れないか。つくづく恐ろしいガキだぜ」

不敵にわらう、おじさん。

グラビティ・フォール。おそらくは、重力が何かを操る能力だろう。

わたしは倒れてはいないけれども、このままだと身動きがままならない。一步踏み出すことだって、大変なのだから。

ポケットからもう一本ナイフをとりだし、おじさんがゆっくりと近づいてくる。

「が、対処はできないか。所詮は素人だな」

歯噛みして、わたしは窒素の針を飛ばす。

でもそれも凄まじい重力に負け、おじさんに届く前に地面に突き

刺さるのみだ。

なんて相性の悪い能力なのだろう。いや、わたしの力不足もあった。こんな能力は初めてだ。

どこまでが能力の範囲なのかは分からないけれども、能力に捕らわれたら最後、どうにもならないみたいだ。

それでもうかつに近づくのは危ないと判断したのか、おじさんはナイフを投げ飛ばしてきた。それは、わたしの右肩にまっすぐ突き刺さった。

「あうっ……！」

今までに味わったことのない、鋭い痛み。傷口から血が流れている。

何とかして、わたしはスパンキー・スパイニーをおじさんに叩き込もうとするけれど、痛みで集中できず、宙へ針を生成するのがやっとで、飛ばすことができない。

もう近づいても大丈夫だと思っただけ、おじさんは走りざま、わたしを蹴倒した。

わたしは仰向けに倒れ、地面で背中を強く打った。

おじさんは、わたしのお腹を足で踏みつけながら、予備のナイフを取り出す。

ナイフの刃に舌を這わせて、おじさんは言った。

「あばよ、嬢ちゃん」

それは終わりを示す言葉だった。本当にあっけないくらいに、わたしは簡単に負けて、そして死ぬのだということを理解した。まもなく、おじさんのナイフが繰り返される。心臓を貫かれるのだろう。ごめんなさい、パパ。先立つ不幸をお許し下さい。

そして、

どん、という拳銃でもぶっぱなしたような音が響いた。

わたしを刺し殺そうとしていたおじさんが、重い鉄球でもぶち当てられたように、吹っ飛んだ。とたんに、わたしの体が軽くなる。

能力が切れたのだ。

わたしは上半身だけを起こし、おじさんを見た。おじさんは肩を押さえながら、わたしの後ろをものすごい顔で睨んでいた。

振り向くと、そこには意外な人物がいた。

「……パパ？」

そう、パパだった。誰でもない、わたしのパパ。

パパは人差し指と中指を立て、その白い煙の立つ指先を敵のおじさんへ向けていた。

「風歌、大丈夫か？」

おじさんを警戒しながら、パパはわたしのもとへ駆け寄ってくる。

「……はっ、そうか、ここであんたが出てくるのかよ、エレメンタル・ゼロ」

「娘に手出しはさせん」

まるで聞いたことのない冷たい声で、パパはおじさんに言った。

「ムダだぜ、死神さんよ。ここで俺を倒しても、そのガキが生きているかぎり、刺客はいつまでも差し向けられる」

「なら片っ端から、片付けるまでさ。それに俺はもう、死神じゃない」

人差し指と中指を立て、指先をおじさんに向けるパパ。拳銃を構えるような動作だ。

「今の俺は、娘を守るただの父親だ」

言い放つや、またずどん、という凄い音。指先から放たれた何かがおじさんの頭を直撃した。おじさんは声もなく倒れて、うごかなくなった。

5

パパは、わたしの傷口をハンカチで縛って止血した。そしてわたしの手を取って、立ち上がらせてくれた。

「パパ……」

何も言わずに、パパはわたしを抱きしめた。

「お前が無事で良かった」

「パパ、知ってたの？ このこと」

「ああ。知っていた。俺もそうだったから……」

わたしはパパの暖かさに包まれながら、心地良いと思った。

家へ帰る道で、パパは全てを話してくれた。

ママのこと。そしてパパ自身のこと。わたしのことも。

パパとママは幼馴染で、パパはかつて？エレメンタル・ゼロ？と呼ばれた、能力者に対する死神だった。

そしてママは、わたしが戦ったことのある能力者がたびたびもらっていた、リヴァイアスと呼ばれる組織の、頂点に君臨すべき存在だったということ。

そしてその子供であるわたしにも、その素質があるということ。だからわたしは能力者から狙われているのだと。

リヴァイアスを疎ましく思っている巨大組織　アース・スプレマシーの能力者から。

「お前には、リヴァイアサンになる素質がある。リヴァイアスの頂点に立つ？統べる者？のことだ。そしてそうなるに足る力も備わっている。だからリヴァイアスはお前をさらおうとするし、アース・スプレマシーはお前を殺そうとする」

まるで、映画か漫画の世界のようなことを、パパは言った。けれど、わたしはそれが本当であることを、知っている。

「俺はな、トウレン 眺良　ママから、お前のことを頼まれているんだ。お前だけは、くだらない連鎖に囚わせないで、って……」

今までの寡黙さが嘘のように、パパは饒舌に話した。わたしを狙う能力者を、ひっそりと倒したりしていたことも……。

「本当は、こんなしがらみなく、お前には普通の人として、生きて欲しかったがな……」

「とうん……。その気持ちだけで、嬉しいよ」

わたしはそう言った。パパは、少しだけ意外そうな顔をしてから、「そうか……」と呟いた。

そう、わたしはその気持ちだけで嬉しかった。人としての平穩が

決して手に入らないのだとしても、パパがそう思ってくれていたことが嬉しい。ママがそう思ってくれていたことが嬉しい。

わたしは初めて、パパと通じ合えたような気がした。

全てを話してくれたパパ。わたしを守ってくれたパパ。

そうだ、これからは、色々話そう。

思ったこと、全て話そう。だってもう、パパに隠し事をする必要はなくなったのだから。

今までのわたしにさよならを。

そしてわたしは、新しいわたしを迎え入れる。

わたしは、七村風歌。ななむら・ふうかパパのことが大好きな、パパの娘。

『わたしにさよならを』了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8681s/>

わたしにさよならを

2011年10月3日03時25分発行